

最優秀賞

ハンバーグ爆弾

茨城県立日立北高等学校 三年

大貫 瑠香

ハンバーグのタネをこねていると、この肉塊の中に爆弾が入っているんじゃないかと思う。想像を振り払うように首を振って、巨大な肉の塊をこね続ける。息を吸うことさえ苦しい真夏の十八時の空気に溺れながら、手早く夕食の準備をしていた。

我が家のハンバーグは直径二十五センチほどで、その大きさと肉汁が飛び出す様子から親戚の間ではハンバーグ爆弾と呼ばれている。お盆の時期になって親戚一同が集まると食卓には必ずこれが出てくる。

「里香、みんな来たんけ？」

流し台で米をとぐばあちゃんが大声で言った。

「花火買いに行ってるって言ったっぺよ」

「そおか」

まるで「そんなこと言われてなかったけど」とでも言いたげなその口調に、内心舌打ちをする。

一時間前も同じことを聞いてきたばあちゃんへ抱く、虚しさに似た感情をどうしていいか分からない。上履きの裏に深く刺さった画鋲を発見した時の様な、行き場の無い苛立ちを無理やり飲み込んだ。

早くに両親を亡くして以来、私がこうやって高校三年生になるまで育ててくれたことには勿論感謝している。だからこそ、灰色の感情が渦巻く。ばあちゃんもいつか私のことを忘れるのだろうか。それがどうしようもなく恐ろしい。

私は人に忘れられるという、心臓を貫かれるような哀しみを知っていた。

「りい、また背が伸びたんじゃねーの？」

茨城弁特有の語尾の上がつた口調で私を褒めるじいちゃんの声。じいちゃんが亡くなってから四年が経った今でも鮮明に思い出すことができる。

私の家族と呼べる存在は、母方の祖母と父方の祖父だけだ。

幼い頃に両親を失った私を、じいちゃんはずいぶん甘やかしてくれた。それで従兄弟たちからはブーイングを喰らうことも多々あった。中でも同い年の銀二くんはじいちゃんによく懐いていて、私がこっそりお菓子を買ってもらおうと玄関で地団駄を踏みながら「りいばかりずるい」と大泣きしていた。じいちゃんは決まって「決めつけは良くねえ。銀にはいつも買ってあげてるでしょうよ」となだめるように銀二くんの頭を優しく叩いた。

時間の流れに反比例するかのようにならぬように私とじいちゃんは会う機会が少なくなった。私は母方のばあちゃんの家を引き取られたのだから、父が死んだ今、じいちゃんと関わる必要性はあまり無い。幼い頃は気にも留めていなかった事実が、いつの間にか父方の親族と会う機会を跡形もなく消し去ってしまった。

それを酷く後悔したのは中学二年生の時。

呆けてるからりいちゃんのこと忘れてると思うけど最期に来てくれな  
いかしら

じいちゃんと同居していた叔母にそう言われて、暗闇に突き落とされ

た心地を引きずりながら病室へ向かった。もう長くない。もう私のことを忘れていた。後頭部を鈍器で殴られたような衝撃に吐き気がした。

「ばあちゃん、味噌汁とハンバーグのたね出来たよ」

「んなら休憩しな。全員集まったら呼ぶから」

ハンバーグ用の大皿を用意し、私は逃げるようにキッチンを後にする。思い出したくないことが脳裏に浮かんでくると何処か遠くへ行きたくなってしまふ。その所為だ。

エプロンを脱いで、それを洗濯籠に入れるために脱衣所へ向かう。居間の前を横切った時、テーブルの上の本が目に入った。

「また背が伸びたな」

じいちゃんの言葉がフラッシュバックする。額を手で押さえた。

弱々しく放たれた声が葛のように心に絡みついて離れない。それはじいちゃんの最期の言葉だった。

それでも口癖のように言っていたあの言葉は、それだけは覚えていた。その言葉を残して息を引き取った。

もつと話しておけばよかったという後悔の念の反面、私は鎖から解放されたような喜びを感じた。ただ、嬉しかった。

それなのに何故。

テーブルの本をゆっくりと手に取る。ガラガラとした表紙の感触と共に「忘れない言葉」と明朝体で書かれたタイトルが目飛び込んできた。帯には「これは僕の実体験です」という文字が大きく書かれている。

作者の名前は松本銀二。本名は葵銀二。高校三年生の新人作家。

紛れもない、私の従兄。

本の帯にある「祖父の最期の言葉は、思い出の言葉だった」という文字をぐっと噛み締めて吐き捨てる。

実体験が元なら、じいちゃんの最期の言葉は銀二くんへの言葉じゃない。

い。じいちゃんはいつも彼に「銀二は本が好きだな」と言っていた。

あの時は確かに、私に言っていたんだ。

私はこの本を一度も読んだことが無い。表紙に触ることさえ見えない壁があるような抵抗感を感じていた。そしてこの本がテレビに取り上げられるほど有名になって、私は裏切られたような虚しさを抱いた。

「また背が伸びたな」

この言葉は一体誰のものなのだろう。

ばあちゃんも私を忘れるのではないかという不安。大事な思い出を利用されたことへの苛立ち。心の中の手が届かないほど奥に押し込められた薄暗い感情が、凝縮されて一つの爆弾のようになっていく。

それがいつか爆発するのではないかと、自分自身に恐怖を感じていた。私が本を手にとったまま固まっていると、キッチンからばあちゃんの声が出た。

「本、読んであげな」

珍しく大声ではない、淡々とした口調だった。

「決めつけんなって、あつちのお父さんも言っていたら」

一時間前の私の言葉は少し歩くだけで忘れてしまうのに、心にのしかかるような言葉だけ覚えているのだからたちが悪い。けれどばあちゃんがまだこうやって思い出せるといふ事実には半ば安心して居る自分も居て、私は「あつそ」とそっけなく言った後、細い安堵の息を漏らした。

この安堵がいけなかったのだろう。私は本を手を持って早足で自室へ向かった。

木の扉を乱雑に閉め、部屋の電気をつける。読書をするだけだということに心臓の音がうるさい。誰かの脳内を盗み見ているような、緊張感と罪悪感。何も悪いことをしていないのに指が震えていた。

ゆっくりと表紙を開く。

『脳内に巨大なハンバーグが寝転んでいる。従妹が、私も手伝ったんだ』

よ」と言った時の一等星のような笑顔と共に。」

一行目の明らかに私を意味する描写に、言葉を失った。その衝撃を皮切りに時間の流れを感じさせない物語の世界に溺れる。

認知症になってしまった祖父の介護をしていた日々を、葬儀の中で主人公が思い返すストーリー。

紡がれる一言一句に心を震わせながら、私は大きくずれた勘違いをしていた事に気が付く。帯に書かれた「実体験」とは、本当に彼の実体験だったのだ。遺産目当てに家上がりこんでくる遠い親戚。介護疲れにより八つ当たりしてくる家族達。それらの描写全てが、想像で書いたにしては生々しすぎる。

ラストシーンで、祖父と最期の別れをする主人公。祖父は「大きくなったな」と消え入るような声で呟き、息を引き取った。

読み終えてもなお、物語の世界で息をしている。そこから抜け出すには時間と力が要りそうだ。

「おーい！ りい姉！ はーなーびー！」

本に囚われたままの心に無垢な声が響く。一番年下の従弟の声だ。

私は心を奪われたままの空っぽの体で玄関に向かった。玄関先から見える外の景色はもう既に暗闇が支配しているが、その中に眩しい火花が煌めいていた。

「りい姉、火花やるー！」

「ちよっと待ってて」

そう返事をして、靴置き場で従兄弟たちの火花に火をつけてあげている彼をちらりと流し見た。私はゆっくと玄関先に腰を下ろす。銀二くんは男にしては長めの髪を耳にかけて、ロウソクの火を見ている。その背中はやけに大人びていて、十八歳ということ忘れてしまいうさうだった。

「あのさ、本、読んだよ」

「……そう」

銀二くんはそれだけしか言わない。次の会話の切り口が思いつかなくて、私はため息交じりに深呼吸をした。

「怒ってるよね」

突如、彼が火傷しそうなほど冷ややかな声で呟いた。

「なんで？」

私がそう尋ねると、彼の鉄のような表情が少しばかり崩れた。

「だって実体験って嘘ついたから。あの言葉は俺の体験じゃない」

「違う」

考えるよりも先に言葉が放たれていた。

「誰のものとかなないんだよ」

最期の言葉は私へ向けたものだった。その事実への執着心から、私は余計な感情を生んでしまっていた。自分は特別だったんだという自惚れと、妙な独占欲。そんなものに囚われて私は、あの言葉を聞くことができたのは銀二くん達のお陰だということをつっかりと忘れてしまっていた。

それを思い出させてくれたのは、紛れもない彼の書いた本だった。

「あの言葉は私のものじゃなくて、こう、みんなのものっていうか。そう思えたのは銀二くんの本のおかげっていうか……」

上手く言葉が紡げない。後頭部を掻きながら時間が経つのを待った。

「……本当は、ずるいになって自分でも思ってた」

独り言のように淡々と、しかし勢いよく湧き上がる何かを抑えるように銀二くんは言った。

「でも」

こちらに向き直り、彼は私の瞳を力強く見つめて口を開いた。

「羨ましかったんだ」

ラムネの中のビー玉のように澄んだ、よく通る声がか心を鷲掴む。

「あの言葉が俺に向けてじゃなくて、りいだったことが羨ましくてたまらなかった」

唇を噛み締め、彼は俯く。

胸のあたりにかかっていた薄暗い霧が晴れていく。あの言葉の所有権はきつと、誰のものとかそういうレベルの話ではない。ハンバーグ爆弾のようにみんなで一つを囲んで共有するものなんだ。大人になってからふと思いついて、酒でも飲みながら思い出話に花を咲かせるような言葉なんだ。そうだ、それでいい。

「晩御飯、ハンバーグ爆弾だよ」

「そっか。俺あれ大好き」

「私も」

手持ち花火の軽やかな噴射の音が耳を掠めていく。線香花火のような儂い夏の夜が、こんなにも心地よいのはいつ以来だろう。私は微笑みながら、火薬の匂いが夜色の空気に溶けていくのを感じた。鼻の奥を軽く突いたそれは、私の心の爆弾が花火になって咲いたときの残り香だった。

## 優秀賞

### 青を焚く

福岡県立福岡講倫館高等学校 三年

紀川 晴好

手の平が大分熱くなってきたので、裏返して甲を暖め始めた。

私の前には焚き火があった。オレンジ色の陥がめらめらと揺らめいていた。そのさらに向こうには真っ黒な砂浜と海が広がっていた。

私の後ろには松の雑木林が広がっていた。やはり真っ暗で、不気味だった。

私の頭上には夜が広がっていた。今日は月が無かったが星は綺麗だった。

そして隣には父が——朝五時に私を叩き起こし、目の前の火を起こした父が座っていた。その隣には大きなゴミ袋が2つ置いてあって、父はその片方から一枚の紙を引き抜き、ねじって棒状にした後焚き火にくべた。

三月の早朝の海岸はとても静かだった。波の音と、背後の木々のざわめきしか聞こえない。今は火があるが、とても寒かった。

手の甲が熱くなったので、私はまた手の平を返した。父は紙の薪をもう一本加えた。

「燃やすか」父の提案に私は少なからず驚いた。卒業式を終えて大学生になるまでの春休みの第一日目の夕食の席で、私の「三年分の教科書と

が残ってるんだけど、どうすればいいと思う？」という何気ない質問に対しての返答だった。

「燃やすって……どこで？」

「海だよ」

聞けば、父は大学生の頃、よくその海岸で焚き火をしていたのだそうだ。初耳だった。

私は少し迷ったが結局父の案を採用した。まだ体験したことのない焚き火という行為に興味があったのだ。

だが、まさか朝四時に出発とは思ってもよらなかった。

突然起こされてもうろうとして私を尻目に父は私の教科書やらノートやらプリントやらをゴミ袋に詰め込み、車のトランクに押し込んでしまった。

私は文句を言ったが、父曰く「焚き火は暗い時にするに限る」とのことだった。

「火が燃えるために必要なものは何だか分かるか？」突然父が口を開いた。

「え……薪？」と私は答えた。

「そう。薪も重要だ。次々薪を足さないとすぐに火は消えてしまう。だけれどもっと重要なのは酸素。空気だ。空気の通り道を作ってやるのが何より大事だ。要するに『かまど』を作るんだよ」

はあ、と私は言った。この焚き火を構成しているのは私が海岸で拾った十数本の流木と父が後ろの雑木林で拾った太くて大きな松の枝だった。流木は松に立てかけられるように並べられ、それが屋根になって下に空間ができていた。父と私はそこに、プリントや破ったノートや教科書を放り込んでいった。

「松ってのは焚き火に向いてるんだ。『たいまつ』も漢字だと、松の明

かり」って書くぐらいだしね」と父は言った。

私はまたはあ、と相づちを打った。そして今日の父はよく喋るな。と、不思議に思った。父は普段口数の多い人ではなかったからだ。これも火の魔力なのだろうか。

私がそんなことを考えてると父が突然立ち上がった。

「よし。このままだと枝が足りないから拾ってくるよ、焚き火は任せた。紙を足す時はねじるか丸めるかして入れろよ？ そのまま置いたら風で飛んでいくことがあるから」

分かってるよ。と答えると、父は暗い砂浜に消えて行った。

私はゴミ袋からまた一枚紙を引き抜いた。家庭科のプリントだった。ねじって棒状にし、その先端を炎に近づけてみた。

移った火は紙を黒く焦がし、侵食し始めた。私は素早く『かまど』の中に突っこんだ。あつという間に薪は真っ白い灰となった。

私は続けざまに世界史、化学、物理、倫理の教科書、ノート、プリントを次々破って薪に変え、くべていった。どれも例外なく灰になり、煙になり、また炎の一部となった。やがて潮が満ちれば、すべては海に還る。

こういうことを「諸行無常」と言うんだっけか。確かめようにも古典の教科書はもう焼いてしまった。

額に流れた汗で、自分の体温が上がっていることに気づき、私は着ていたコートを脱いで、その下のセーターの袖をまくった。

「大分育つたな」振り返ると父が帰って来ていた。両手にはたくさんの流木を抱えていた。育つた。とは焚き火のことだろう。確かに最初と比べてかなり大きくなった。

「もうそこまで大きくなればちよつとの事じゃ消えない。そろそろあれ燃やすか」

父に言われて、私はもう片方のゴミ袋から一着の服を取り出した。

それは。私が通っていた高校の制服。三年間共に過ごしたブレザーだっ

た。

「どう置いたらいい？」私は父に尋ねる。

「そのまま被せるように置いたらいいよ」

父の言う様に、火全体を覆うようにブレザーを被せると、一瞬火は消えてしまったように見えたが、すぐに虫喰いのような穴をあちこちに開け始め、広がっていった。

「石油で出来てるからな。良く燃えるぞ」

父が言った。私は炎を抱えて溶けてゆくブレザーを見ながら、高校三年間のことを思い出していた。

私は美術部に所属していた。幼い頃から絵を描くのが好きだった。

そこそこの規模の大会で、そこそこ大きな賞をもらったこともあった。大きな絵を、部員全員で協力して制作したこともある。私の美術部員としての高校生活は、まあ充実したものだった。

私は絵を描いている最中よりも、描く前にどんな絵にしようか構想を練ってる時や描き上げた作品を皆に見せて、感想をもらう時の方が好きだった。顧問の先生や部員の皆、絵について造詣の深い父は忌憚なく意見を述べてくれた。一通り全員に見せたあと、私はいつも作品がある場所へ運んだ。

母のいる病院だ。

白いベッドに横たわる母は、私の絵を手にとってしばらく眺めた後、決まってこう言った。

「すごいねえ。私にはとても描けないから尊敬しちゃうよ」

それがお世辞でないことは分かっていたし、母は絵について詳しくなかったので単純な言葉になってしまうのも当然だったが、私には張り合いがなかった。

でも私は新しい絵が描ける度に母の病室に運んだ。母は気に入った絵

を壁にかけてくれたので、母の病室はいつしかちよっとした画廊ギャラリーのようになった。

母が、亡くなるまでは。

それはちょうど2回目の夏休みに入る直前のことで、私は大会用の絵を描いている途中だった。

始めに言っておくと、私も父も泣いたりはしなかった。何故なら母の余命が残り僅かなことは本人を含めて皆把握しており、覚悟はできていた。そして、母は誰かの気が沈んでいることが、何よりも嫌いだだった。

だから悲しいのは当然だが、いつまでも悲しみに沈んでいたら、母を心配させてしまう。そう思ったのだった。

ところが、母の葬式が終わって部活に復帰した私に、ある変化が生じた。

絵が、まったく描けなくなってしまったのだ。

私は読んだ本や聴いた音楽から着想を得ることが、多かった。だから本、音楽、映画、他の人の絵、それこそ焚き火に薪を足すように次々吸収したが、私の頭には何のイメージもわかず、手は何も生み出さなかった。

そうしてついに、夏休みが終わる頃に私は美術部を退部した。以来一枚も絵を描いていない。

私は母のために絵を描いてるつもりは無かった。しかし、母の言葉、存在そのものは、私が絵を描く上で最も重要な「空気」だった。空気が消えてしまつては、火が点くはずも無かったのだ。

シャツ、スカート、ネクタイをすべて焼き尽くし、ついにゴミ袋には一枚の紙を残すのみとなった。

母が死んだ時に描いていた、私の絵だ。

当然未完成だった。これからも、二度と完成することはない。私は深

呼吸して、ゆっくりと、紙を、火の上に、乗せた。

火が紙を包みこむ、その瞬間。ひゅっと風が吹き抜けて、私の絵は宙に舞い上がった。

「紙はそのまま置くなって言つたら……ところであれ燃やしても良かったのか？」

私は父の言葉に答えることが出来なかった。目の前の光景があまりに美しく、絶句していたのだ。

いつの間にか夜は明け始めていた。空は濃い青で、水平線に近付くにつれ薄くなっていった。その青の中を鮮やかなオレンジただが唯一、くるくると落ちていた。

私の絵はそのまま海に落ちて、炎は消えた。

今まで見た中で最も鮮やかな青だ。その中を横切った炎は何より美しかった。

ボツという音が、私の中で確かに聞こえた。私は何だかいても立ってもいられなくなった。そうだ、描こう。久し振りにそう思った。

「焚き火って楽しいね」私は言う。

その言葉に父は少し驚いたようだが、やがてとても嬉しそうに「だろ？」と言った。

ああ、早く。早く絵を描きたい。母は何と言うだろうか。

燃え盛った炎は、もはや消えそうに無かった。

## 優秀賞

### 春の七草

山口県立徳山高等学校 三年

芳岡 未那

桜が満開となったある日、一人の女子生徒が廊下を歩いていった。彼女の名は、芹なずな。偽名ではない。芹なずな、本名である。

「やーい、せりなずなー」

「ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」

「春の七草と同じクラスなんてさあー」

「ちよーウケるー！」

キヤハハハッと声高に、派手な女子生徒が通り過ぎていった。芹なずなはその背中に向かって、金切り声で叫んだ。

「バーカ！ 死ね！ 消えろ！」

「キヤハハハッ、草の分際で激おこじゃーん」

派手ガールズはろくに相手をせず、笑って去って行った。

この名前のせいで、芹なずなは生まれてからの十七年、誹謗中傷とは切っても切れない関係だ。なぜ、親は『なずな』という名前にしたのか。親に名前の由来を尋ねてみる気にもなれない。

「文芸部に入りませんか」

桜が散り始めた頃。最近やたらと勧誘してくる人間がいた。その名も、赤川太郎。これまた何という名を親はつけたのだろうか。彼の弟の名は

きつと……。

いや、そんな話はここで不必要だ。今この話を読んでいる君たちに必要なのは、赤川太郎の情報だろう。彼は名前のとおり、文芸部に所属している。しかし、小説を書くのは面倒らしく、俳句を詠んでいるらしい。らしい、というのでも、確証がないからである。彼が表彰のために壇上上がった姿は、一度も見たことがないのだ。

「入部しませんか」

「やだ」

「暇でしょう」

「うるさい」

「絶対楽しいですよ」

「死ね」

「とりあえずどうですか」

「消えろ」

「……ピエロ？」

「消えろつつつてんだろ、バカ！」

芹なずなは教室を出た。女子生徒たちの笑い声、赤川太郎の視線が追いかけてきた。

次の授業、サボろ。

若葉がすっかり生え揃ったある日。教室の机に、見慣れないものがあつた。落書きはもう見慣れている。今日は落書きの代わりに一冊の分厚い辞書が置いてあつた。

新しい中傷法だ……。私が頭が悪いのを強調するためか。

しかし、よく見ると辞書ではなかった。『歳時記』と書いてある。適当なページをめくってみる。

【若葉】 山若葉・谷若葉・里若葉・樟若葉・椎若葉・柿若葉・樅若葉

葉・葛若葉・若葉時・若葉風・若葉雨

初夏の季語。木々の芽は、春に出てきて、初夏のころになるとみずみずしい薄緑色の葉に生長する。その若々しい美しさから、和歌・俳諧では「若葉」と呼ばれ、多くの作品に詠まれている。

そのあたりにうじゃうじゃ生えている木にそんな意味があったのか、と少し驚いた。朝日に照らされた若葉を見た。いつもより生命力を感じたのは、気のせいだったのだろうか。

「あ、それ僕の歳時記です。間違えて芹さんの机に置いていましたか」

何をどうしたら間違えるのだろうか。彼女の机は現在窓側の列の最後尾。彼の机は廊下側の列の最前席である。

「歳時記っていうのは、俳句で使う季語の説明書みたいなものですよ。その季語の季節はいつなのか、どのような句が例としてあるのかが分かるんです。おもしろいでしょう」

「全然」

「あ、ここでの『おもしろい』は『いとをかし』の方ですよ」

「知らん」

「なるほどなるほど」

知らない、と言った後に、なるほど、と言う人なんて他にいるのだろうか。芹なずなは呆れて教室を出た。特に行くところもないが。

「はい、そのまま前にお進みください」

聞き飽きた声が背後から聞こえた。鳥肌が一斉に立った。そして言われるがままに、足が勝手に動いた。不意の出来事だったので、反抗心も縮こまってしまったようだ。

「階段を下りてください。三階まで。……はい、では左向け左をして、前進」

後ろでピッピ、ピッピと笛を吹く真似をしている赤川太郎。もういい。このままこいつのノリに付き合っただけよう。後ろにいるから監視されている感じで、逃げるのが面倒になった。それにしても、私をどこへ連れていくつもりなのか。

「全体、止まれ。左向け左」

目に飛び込んできたのは、漢字三文字。

「……文芸部」

「そうですね。さ、どうぞ。鍵はかけていないので」

「帰る」

「そんなこと言わないでくださいよ。いつも保健室で欠課するのも、退屈でしょう。たまには部室でもどうですか」

「……勝手に入ったらヤバイでしょ」

「ああ、その点はご安心を」

赤川太郎は、重たそうなドアを開けた。

一時間目はLHRのはずだった。しかし今、俳句の授業を受けている。

生徒は芹なずな、先生は赤川太郎。普段は真面目な彼が欠課した訳は、授業内容が嫌だからという、単純かつ正当な理由があった。

「僕みたいな人間が意見したところで、結局は聞いてもらえないのがオチですから。だから、文化祭の話し合いは嫌なんです」

芹なずなは欠伸を一つした。この俳句の授業っていうのも、中々つまらないよ。寝ちゃおうかな。

「はい、ではその歳時記で『春の七草』を調べてみましょう」

実践式の授業か。こりゃあ、眠れそうにないな。

## 【春の七草】

新年の季語。一月七日の七草粥に入れる若菜を「春の七草」と呼ぶ。もともと七草の種類については、時代によっても地方によってもすこし相違がある。一般的には、芹・薺・御形・繁縷・仏の座・菘・蘿蔔の七種とされる。かつては、むしろ七草をそろえるのが大変であったらしく、近世の都市生活者たちは、必ずしも七種類でなくても「七草粥」といつていたようである。

「どうです？ 悪い意味なんてないでしょう」

芹なずなは顔を上げた。赤川太郎は、ゆっくり語りかけるように言った。

「確かに『芹なずな』なんて名前は、周囲の人から見れば驚きですが。でも、よく考えてみてください。七草粥を食べるのは、一年の無病災息を願うためなんですよ。

あなたのご両親も、そういった願いを込めたのではないのでしょうか」

「……そうだとしても、ださい」

「あはは、それを言われたら僕も終わりですよ」

お互いの顔を見合わせ、吹き出した。

「せりなずなー」

「ごぎょう、はこべら、ほとけのぎ、すずな、すずしろ」

芹なずなは、背後から聞こえたその声にびたりと足を止めた。そして言った。

「『春の七草』の季節を述べよ！」

派手ガールズは思ってもみなかった反撃に、たじろいだ。

「えっ……そりゃ、春でしょ」

「あっはははははは！」

芹なずなが吹き出した。進級した頃の、憎しみのこもった目をした彼女は、どこにもいなかった。

「えっ、ちよっ、なにこいつヤバイヤバイヤバイ」

「マジヤバいって、ちよっと」

二人はそそくさと去っていった。

「赤川、撃退したよ」

「おめでとうございます」

「あいつら最後、『ヤバイ』しか言っていなかったよ。最近の若者っていうのは、すごく言葉が貧乏だなーって思って、笑えた」

「あなたも以前は同じようなものでしたよ」

「まあ、そうだけど。でもさ、あたしは文芸部に入ってから変わったよ」

「そりゃあよかったです」

ふたりは笑いながら、夏の光のあふれる階段を下りて行った。

## 佳作

# 感情エネルギーの法則

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 二年

長谷川 佐和

「ねえ、いつも思ってたけど、それ何？」

カナは、ヒデのポケットから出てきた、白くて小さな三日月形の物体を指さして言った。

「え……知らないの」

カナは眉間にしわを寄せ、不機嫌な顔を隠さなかった。

「テレビで見たことない？」

「あんま見ないし、テレビ」

で、なんなの、とカナはもう一度指を指した。

ヒデのポケットから出てきた、白くて小さな三日月形の物体。これは感情エネルギー電池、通称「カンチ」というものだ。

「感情エネルギー」という新しいエネルギーの形が発見されたのは、ヒデが小学生のときだった。エネルギーといっても、それは物を移動させたり電力を生み出したりする力学的なエネルギーの一つではない。感情エネルギーとは、「思考・感情・願望を、実際の行動に移す原動力」、つまり、「感情の振れ幅」のことである。

この革新的なエネルギーの発見から間もなく、ある研究者が、それを人間の外部に取り出すことに成功した。「カンチ」とは、その名のとおり、

感情エネルギーを人間から取り出して蓄えたり、人間に供給したりできる電池のようなものだ。

カンチはすぐに精神医療に応用された。カンチによって感情エネルギーが体外へ取り出されると、心の動揺は抑制され、逆に感情エネルギーを与えることで、無気力な人を活動的にすることができたからだ。

ヒデは中学二年生のとき、病院の先生から初めてカンチをもらった。ヒデは幼いころからなにかと悩みやすい性格で、感受性の強いヒデにとって、カンチはなくてはならないものだった。心にモヤモヤがあると、近所の公園にある池のほとりで日が暮れるまでぼうっとするのがヒデの習慣だった。カンチを持つようになってからは、ぼうっとする代わりにカンチで心を落ち着けた。

ヒデとカナがいたのはその池のほとりだった。

「カンチを使うって、どんな感じなの？」

ヒデがスマートフォンでカンチを検索して見せると、カナは興味津々に聞いた。

「カンチは、左の耳の後ろに付けるんだけど——」

ヒデは思い出すように目をつぶった。

「付けてから少しして、呼吸が深く、楽になるんだ。空気の通り道が開いた感じかな。筋肉もちよつとずつほぐれてきて、あと、視界が冴える感じもあるかな」

視線を感じて恥ずかしくなったヒデは、目を開けた。

「えっと、これは僕が沈んでいるときの話だから、興奮しているときに使ったら、また全然違うと思うけど」

ふーん、と言い、カナはヒデの顔を覗き込んだ。

「じゃあ今、沈んでるんだ？」

ヒデはどう答えていいのか迷った。

「うん、まあ、うん……」

「いつもと同じに見えるけど」

カナは笑ったが、それは当たり前だった。ヒデがここに来るのは、気持ちが悪んでいるときであり、カナはこの池のほとりではしかヒデに会うことがない。カナは沈んでいるヒデしか見たことがないということだ。

ひよい、と、カナはヒデの手からカンチをとった。

「これ使ってみてもいい？」

カナはカンチについて、本当に何も知らないようだった。

「いや、使えないよ」

「どうして？」

「カンチはその人専用なんだ。他の人が使ったらどうなるかわからないから、自分以外使えないように安全装置がついているんだ。だから付けてみたって使えないよ。」

そもそも、そのカンチには僕のネガティブな感情がいつぱい入っているし、使ってもいいことないよ」

なんだ、と言って、カナは立ち上がった。

ヒデとカナが出会ったのは三か月前の、六月のことだった。長く続いた雨がやっと晴れに変わったころ、カナはヒデの前に突然姿を現した。

「私、加奈。名前聞いていい？」

カナがヒデの手を強引に握ったその日から、ヒデが池にいと、必ずカナが来るようになった。

カナはヒデにとにかく興味があるようだった。ヒデは最初、何を話せばいいのかわからないと思ったが、カナがヒデを質問攻めにするので、会話に困ることはなかった。

将来の夢は？ 大学決めた？ 何か習い事してる？ 芸能人なら誰が

好き？ ——質問は何の脈絡もないものばかりだったが、カナは強気な

見た目と裏腹に話をよく聞くので、ヒデも次第に心を開くようになった。

会話に少しの沈黙がうまれたとき、ヒデはそこへ来た本来の目的を果たそうとした。ヒデがポケットからカンチを取り出し装着する一連の流れを、カナはじっと見ていた。

ヒデはいつもの場所に座り、カナもいつものようにそこへ来た。カナは、ヒデがボールを持っているのに気付いた。空気の入りきらないプラスチックのボールは池に入ったのか、少し濡れて汚れていた。

ヒデはボールを持ったまま、池の対岸で遊ぶ小学生くらいの男の子たちを見ていた。その中で、少し痩せて背の高い男の子が、輪から外れていた。

「どうしたの？」

「あ、このボール……」

赤いボールを持ったまま、ヒデはうつむき黙り込んだ。

「あの子たちの？」

ヒデはたぶん、と頷いた。どうすべきか悩んでいるようだった。カナもヒデも何も言わず、ボールを抱えてしばらく突っ立っていた。

すると、男の子たちがこちらを向いた。ヒデの持っているボールに気づいたようだ。何か言って笑っているが、ヒデとカナには大きな笑い声以外はつきり聞こえなかった。そのうち、赤いTシャツの男の子が輪から外れた男の子に向かい合った。

「取り戻してきて」カナ」

カナには同じくらい小さな弟がいたので、このくらいの男の子たちの考えそうなことがわかった。

池の左側から、男の子がとほとほとこちらに歩いてきた。その悲し気な足取りを突っ立って見ているうちに、他の男の子たちと近くに止めら

れていた自転車はどこかへ消えていた。

そばへ来た男の子が口を開く前に、カナは言った。

「このボール、へによへによ」

カナは男の子へボールをパスし、バレーボールできるかと聞いた。男の子は黙ってカナにボールをパスした。

はじめ男の子は何もしゃべらなかつたが、カナが一人で盛り上がっているうちに、男の子にも笑みが見えるようになってきた。

「ヒデ、審判やって」

なんの審判かはわからないが、ヒデは審判を任された。

「あっ」

練習とも、試合ともわからないパスを繰り返すうちに、男の子のパスしたボールが池へ落ちてしまった。

ヒデはそのボールを走って取りに行った。ボールは池の岸から少し離れた場所に浮いており、ヒデは膝までザブザブと浸かって何回かボールをつると滑らせながら、腕に抱えることに成功した。そのとき、近くのマンションの、夕方五時のチャイムが鳴った。ヒデの顔には苦笑いが浮かんだ。カナも男の子も同時に笑った。

ヒデはハンカチでボールを拭いて、男の子に渡した。男の子はありがとう、と言って、帰っていった。

ヒデは池のほとりに座り、びしょびしょに濡れたズボンの裾を絞った。そして、はっと思い出したように、ズボンのポケットに入れていたカンチを確認した。カンチの無事を確認すると、「よかつた」という小さいつぶやきがヒデの口からこぼれた。そんなようすを見て、カナは少し寂しそうな顔をした。

「ヒデはどうしたら幸せになれるの？」

質問は唐突だった。え、とか、は、とか言いながら、ヒデは困った。質問から回答までには、だいぶ時間があつた。

迷った挙句、ヒデは言った。

「幸せじゃ、ないことはないよ」

「幸せって言うてくれないと帰れない」

カナのようすがおかしいと思い、ヒデは、「どうしたの？」と聞いてしまった。はあ、というため息とともに、カナは呆れたようすでヒデの隣に腰を下ろした。

「ねえ、カンチ知らない人なんて、本当にいると思う？」

どうやら、カナがカンチを知らないというのは嘘だったようだ。しかし。急なカンチの話は、ヒデをますます混乱させた。

私ね、とカナは語り口調で話し始めた。

「ゴールデンウィークに、治験のバイトしたの」

「治験」とは、開発された薬の作用や副作用などを調べるために、実際の人に対して使用検査をすることだ。アルバイトが募集されることもある。

「最近って、カンチ関連の治験多いのよ。新しい機能とか、安全装置の機械とか、色々開発されてるから」

いつものカナのような、流れるような口ぶりだったが、ヒデにはその話がどこへ行くのかわからなかつた。

「私がやった検査ね。『他人の感情が入ったカンチを使ったらどうなるか』ってやつだったの。」

他人と同じ気持ちになるって想像できる？ 私はその人がどういう人で、何が原因でそんなに悲しいんだかわからないけど、なんだかすごく、胸がどきどきそわそわして、不安で、やるせない、そんな感じがした。

すつごく不幸な人には同情するし、なんとかしてあげたいと思うでしょ？ それはたぶん、その人の気持ちを追体験するからだよね。それと同じで、なんとかしてあげないとして、本当に耐えられなくなったの。だって自分のことのように悲しいんだもん。自分の悲しみを解消するために人間は自然に動くでしょ」

カナの言う「その人」とはヒデのことだった。カナはヒデの本物の感情を自分のものとして共有したという。ヒデは頭では理解できたが、感覚としてはよくわからなかった。

「治験の守秘義務、やぶつちやった。内緒ね」

えいつ、と言って、カナは突然ヒデの手首をチョップした。カンチは力の抜けたヒデの手から簡単に落ちていった。

ヒデはとっさのことで何も言えなかった。カナは目が合うと、にやりと笑った。

池は中心に向かって坂になっていた。坂を下り始めたカンチを、ヒデは慌てて拾おうとしたが、カナの手がそれより先にカンチをつまんだ。

そして流れるような動作で、カナはカンチを池へ投げた。

トブン、という音とともに、池の水が跳ね上がる。

「ちよっと、なんで……」

「あんなのないほうがイイわよ」

そうしてカナはガシガシと坂を上っていく。ヒデはどうしようもなく後を追った。

急に振り返ったカナに、ヒデはまた驚いた。

「やっぱり感情エネルギーっていうのは空気を介して、半分半分、分け合うものよね」

## 佳作

### 椿葉うさぎ

千葉・国府台女子学院高等部 二年

佐藤 朱里

昨日の積雪は大層ひどいものだった。目を覚まして二重ガラスの窓を覗くと、外は蒼天と銀世界が稜線を境にはつきりと隔てられている。盆地にある私たちの集落は、雪化粧を施した山々によって、完全に包囲されていた。

両親は雪かきに追われ、私はというとそれに巻きこまれて重労働を強いられた。妹も一緒かと思いきや、大雪に犬の如く喜び庭を駆け回った挙句、今朝は三十八度五分を叩き出してベッドでうなっている。

「疲れた……」

スキーウェアを脱ぎ捨てて、家の裏に座りこむ。背中が汗でぐっしょりしていて気持ちが悪い。そのくせ、手袋をしても指先がジンとして痛い。恐らく、赤くなっている。

「お疲れ様」

両親の死角で、密かにしばしの休息である。投げかけられた労いが身に染みる。唐突な豪雪は人々の余裕を奪うものだ。両親は終始無言で埋もれた車を掘り起こしている。

「そっちこそ。家のお手伝い、大変だよな」

そこで、ふと気が付いた。周囲を見回すが、家の裏には人影は皆無。

私がたった今、会話をしたのは誰だったのか。

「ここだよ、ここ。全く、人間の目は節穴なのかい」

少年らしき変声期前の声は、私の足元から聞こえてきているようだ。何がなんだかよく分からないままに視線を落とすと、そこにはもつくりとした白い塊が一つ。二つずつの椿の葉と南天の実は、お隣の佐藤さんの庭から拝借したものだろう。

「えっと、どちら様ですか」

朝からの雪かきですっかり疲労の溜まった私の頭は働いておらず、分かりきったことを尋ねていた。向こうも赤い南天の目を細め、「分かりきったことを訊くんだね君は」

と、呆れ顔をされた。

「じゃあ自己紹介をしてあげよう。見ての通り、僕の名前は雪うさぎさ」  
そうだ。椿の耳と南天の目は、雪うさぎの典型的パターンだ。ただ一つ疑問なのは、声帯も大脳も有さない雪の塊が、ヒトの言語を話している点であるのだが。

その雪うさぎの話によれば、彼——自ら男性であると主張した——は、昨日我が妹が製作した作品の一つであるらしい。雪が喋るとは、私は相当疲れているようだ、その夜はたっぷり休養をとったのだが、翌日に家の裏に来てみても、やはり雪うさぎは喋った。昨夜降った雪に埋もれて、「誰か、雪を退かしてくれないか」と情けなくぐもった声で助けを乞うていた。

奇妙なものだと訝しんでいたのだが、この雪うさぎ、話してみると結構面白い。というのも、かなりの博識なのだ。古代人の灌漑技術や、黒船に乗っていたペリーの人となりについてなど、興味深いがどうでもいいことを饒舌に話す。

「なんでもうさぎは何でも知ってるの」

純粹な疑問をぶつけると、

「僕は全部、この目で見てきたからさ」

なんて、ませた冗談で返す雪うさぎ。生意気な奴だ。その時点での彼の年齢は、妹に作られてからの、たったの一週間と三日だけである。

そんな雪うさぎは、器用な妹のお陰か、最初こそ楕円体を半分にしたような、なめらかなボディをしていたのだが、除々にゴツゴツと歪になっ  
てきていた。雪が固まってきたせいだろう。絵本の雪だるまのように、  
いつまでもふわふわではいられないのだ。

「あんたもくたびれてきたね」

にやけながら茶化すと、慥然とした彼は、

「そりゃあ、雪だから。君と違ってね」

「……え？」

そこで私は、思いがけず呆然とさせられてしまった。

「うさぎ。……あんた、声変わりしてる？」

緩やかな変化で気が付かなかったが、その声音は確かに成長していた。  
私の問いに、彼はなんでもないことのように頷く。

「当然だろう。生きとし生けるもの、皆老いるんだよ」

そんなことは知っている。ただそれが「喋る雪うさぎ」にも適応され  
る法則だったとは知らなかったただけだ。

「じゃあ、うさぎも死ぬの？」

「死ぬさ」

「いつ死ぬの」

「今年の雪が解ける頃」

私は何も言えず閉口した。今朝、母から今年の雪は早く終わると聞い  
たばかりだった。

じつと雪うさぎの赤い目を見つめる。悲嘆も畏怖も読み取れない。南  
天の目は、もう色あせてきている。

「死ぬのって、怖い？」

私が数十年先まで経験しないであろうことを、この小さな白いうさぎ

はあと少しで迎えるのだ。全身がざわつく。マフラーも手袋もしている  
筈なのに。

雪うさぎはしばらく黙っていたが、やがて合点がいったふう否定し  
た。

「いいや。でも、君は恐れているようだね。だから見せてあげよう」

何を、と私が尋ねる前に、彼は言った。

「僕の人生をね！」

——その瞬間、私は雪になっていた。

春になると、私は解けた。でも痛くもなんともない。ただ形が変わっ  
ただけだから。

水になった私は、どんな場所にも行ける。川を流れ、魚たちと泳ぎ  
ながら海を目指すことができる。地中に染みこむ湧き水となって眠るこ  
ともできる。千年、二千年もの長い間、暗い大地の底で。

でも、冒険心が擽られた私は、海を泳ぐことにした。

地球を覆う海は何処までも果てしなく広い。私は国境を飛び越えて、  
あちこちを旅した。途中で深海に潜って、ばったり出会ったリュウグウ  
ノツカイにご挨拶。ダイオウイカの大きな触手とハイタッチ。ライトで  
海中を探索中の潜水艇を横目に、そろそろ太陽が恋しくて、海面を目指  
した。

北極の氷山の中に何万年も閉じこもるニート生活も捨て難いけれど、  
私は太陽に焼かれて水蒸気になることを選んだ。きつと、空を泳ぐのも  
爽快だろうから。

空中を昇って昇って、渡り鳥とたわむれながらまた昇って、辿り着い  
た雲の上。丁度、その時はとても寒かったようで、私は雨ではなく雪に  
なった。雪になって、ふわりふわりと下界へ舞い降りていく。

ねえ、うさぎ。見てよ、あれって私の家の庭じゃない？

雪の私が降り積もったところを、見覚えのある顔が覗きこんでいた。

「犬は喜び庭かけまわり、猫はこたつで丸くなる！」

陽気に歌いながら私を掬い取ったのは、間違えるわけがない、我が妹だ。

そこでやっと理解した。これは、雪うさぎの記憶の疑似体験なのだ。妹に雪うさぎとして形作られていたところで、急速に現実に戻された。目の前にはちよこんと佇む澄まし顔の雪うさぎ。

「やあ、お帰り」

まるで壮大な映画の余韻に浸っているような心地で、「ただいま」と眩いた。

気が遠くなるくらい長い旅路を辿っていた気がする。不思議と、先程まで感じていた、死に対する漠然とした恐怖は、綺麗に消え去っていた。つまり、そういうことなのだ。うさぎはいなくなるが、うさぎだったものは世界中を巡って、またいつかうさぎになったり、雪だるまになったりする。怖いどころか、次に自分が何処へ行くのか楽しみですらある。水の循環とは、そういうものなのだ。そしてそれはきつと、水に限ったことではなくて、私たち人間も同じ。

「うさぎ」

「何だい」

小さなその体を両手で包みこんで、精一杯の歓迎の意を込めて、微笑んだ。

「遠いところをようこそ、うさぎ！」

溶けるから降ろせと文句をつけた雪うさぎから、それ以上の返事はなかったのだが、その白い顔に微笑を見た気がした。

それからというものの、雪うさぎの声は瞬く間にしゃがれていった。私はとりあえず、凍った彼が地面に縫いつけられないよう、皿の上に乗せてやって、老いていく彼を見守った。

「最近、暖かくなってきたね。あんたも随分小さくなってきた」

「君の方は全く変化がないね」

「当然でしょ。私は一冬で解けたりしないし」

「そうだね。僕よりずっと、長生きだ」

それが、私と雪うさぎの最後の会話。

翌日。まだ解けきらない残雪がちらほらと見える家の裏。私が用意した皿の中には、もう枯れ果てて色を失った椿の葉と南天の実、それから雪解け水が少し。

朝日に反射して微かに光る水。彼は無事、次の旅に立ったらしい。

人間は、雪うさぎよりかは幾分、長寿かもしれない。でも、何万何億と続く彼の旅路に比べたら、私たちの命なんてほんの一瞬だと思う。

彼が次の旅で手始めに何処へ行こうとしていたかは知らないが、出発前に少々、寄り道してもらおう。

皿の水面には、企んだ顔の私が映っている。

ためらうことなく、私はその水を一気に煽った。

後に残るのは濡れた南天の実、そして椿葉。

またね、水うさぎ。

## 佳作

### 実り

千葉県立東葛飾高等学校 二年

生天目 咲樹

都会より小さい電車からの風景は、都会より広々としている。風が吹くたび稲が波立ち海のようなようだ。あのモンシロチョウはハマグリ、カカシは人間、ああ空が青い。このまま泳いで行って、智子たちのいる本物の海に行きたいような気もする。でも、ばあちゃんが待つてる。

ふと、ポッケを探る。二年前まで通っていた中学校のダサイジャージの大きいポッケには、小銭入れと、端っこが折れた葉書きが入っている。「百合子へ あけましておめでとーう 今年の夏もばあちゃんはトウモロコシを沢山作って待っています ばあちゃんより」

墨で書かれた綺麗な文字。そしてトウモロコシの水彩画。粒の一つひとつが艶々と描かれ、生き生きとしている。じいちゃんの絵とはまるで対照的だ。なんせじいちゃんの絵は戦争で死んだ人ばかりをモチーフにしていたのだ。この惨事は忘れてはいけないことだから、と。それはまるで自分が死んだときに、自分が忘れ去られるのを恐れているようだ。もし私なら、生きている人には死んだ自分なんか忘れて明るく生きてほしいと願うだろうけど、それは、人に囲まれて生きる人の贅沢な考えなのだろうか。

『次は、●●駅、●●駅——』

「百合子ちゃん！よく来たわね」

久しぶりの孫との再会は嬉しかろう、さぞ嬉しかろう。仏壇の前へ行きじいちゃんの遺影に手を合わせる。

「ほら、百合子ちゃんの大好きなトウモロコシ。家に持って帰り」

そう言って私に大きな袋を渡した。ありがとう、とだけいって鞆にしまった。

「百合子ちゃん、料理手伝ってもらえる？」

「いいよ。」

「そうだわ百合子ちゃん、学校はどう？」

「楽しいよ。」

「仲良しのお友達はできた？」

「本当は今日遊びに行く予定だった。」

「もう帰っちゃうの？」

「来年もきつと来ますって。」

「百合子ちゃんが毎年来てくれるおかげでこうして生き延びているのよ」

「そう言われると来ないわけにはいきませんね。」

「ばあちゃんの生きがいなのよ」

「良かったです。」

「百合子ちゃんがいてくれてよかった」

綾香ちゃんは？

私はばあちゃんの名前を知らない。親族がいるのかもわからない。百合子がなぜ死んだのかもわからない。ただ、隣の畑の農家さんが、

「先月孫が亡くなったんよ。じいさんを亡くしてまだ半年も経ってないこんな時になあ」

と私に話してくれたことがある。娘か息子が家に訪問している気配は無

いから、たぶん一人ぼっちだ。

たまたま家出先でこんな風に出会ったばあちゃんと、四年間も関係が続くとは思っていなかった。でも私はこの関係に満足している。

サンタクロースの存在を信じる子供に真実を告げないことは「騙り」だろうか。そしてその仮想に付き合っただけでプレゼントを渡し、喜ばせることは「裏切り」だろうか。私はそうは思わない。ばあちゃんは毎年靴下を空けて待っている。お手紙を書いて待っている。だから来年も私は、ばあちゃんが、美しく透き通った空想トウモロコシを入れた、空っぽの大きな袋に、仮想を沢山詰め込んで届けるだろう。

私はきつと、ばあちゃんが死んでも忘れない。生きるものにとって生きることの喜びとは、この世に自分のひっかき傷を残すことだろう。

ところで、私はどうなのか。この世界を全力で生きてどうにか功績を残すのも良いけれど、最近なぜだか、欲望と解消の繰り返しで空しい。死んだらやつとそれから解放されるのだ。

それでも私は智子と海に行きたいし、ばあちゃんがあややって喜んでくれるのに喜んでいい。空は綺麗だし、緑の稲は秋になったら実を成して、私の一部となってくれるのだろう。そうやって当たり障りのない欲を思い浮かべてはどうしようもない哀愁を感じるときに一番、私は生きていいのだなと思える。

ばあちゃんが死んだら、私の世界から「百合子」は消え去るだろう。でも綾香はまだまだ生きるつもりだ。少なくとも、死の恐怖を乗り越えたあとのトウモロコシを、生き生きと描けるようになるまでは。

ふと外の風景に目をやる。茜色の空、それに相変わらずの緑だ。葉と葉の間を翅打ち翅打ち、モンシロチョウは進む。そういえばハマグリは飛ばないのだった。

# 泳げない人

大阪府立岸和田高等学校 二年

中庭 里沙

小さい頃からプールの授業が嫌いだった。体の弱かった望は夏に数回ある授業のうちの半分も出席できず、中々泳ぎが上達しなかったのだ。特に息継ぎが苦手だった。息が続かなくなると顔を上げるのに、吸い込んだ空気は何故か余計に息苦しさを増幅させ、耐えきれなくなると足着かなくてはならなかった。そうしてコースの途中で立ち止まったときには、もう既に他の同級生は端まで泳ぎ切りプールから上がるところだった。

「失礼します」

ドアを軽くノックして中に入る。高校生になっても体は弱く、保健室の常連になっていた。

「おはよう、山内さん」

低く落ち着いた声が返ってくる。養護教諭の暮林先生は男性だ。小中学校では女の先生だったし、女性のイメージが強かったので驚いたが先生の低い声には不思議と落ち着くものがあった。

「どうした？体調悪い感じかな？」

この先生は毎日のように保健室に来る望に毎回こうやって優しい声で聞いてくれる。その声が望はとても好きだった。大体の保健室の先生は

初めの方こそ丁寧に容態を訪ねてくるが、望が保健室に通いつめる体の弱い生徒だと分かるとそれも適当になる。黙って体温計だけ渡された事もあった。

「頭が痛いので少し寝かせてください」断ってベッドに入る。昨日よく眠れなかったせいか体が重い。四時間目の苦手な数学には出たいので三時間目は一時間休むことにした。不眠症気味の望だが、この保健室ではよく眠ることができた。先生は植物みたいな人だと思う。二酸化炭素を吸って酸素を放出しているに違いない。この保健室はとも息がしやすい。

横になるといくら気分がましになった。硬いベッドにゴワゴワしたシート、消毒液のおい、時々、先生が何やら作業する音。瞼を閉じると徐々に意識が遠くなっていく。

「失礼しまーす」

ガラガラと乱暴に開いたドアの音に一気に現実に戻された。

ノックもせずに誰かが入ってきたらしい。声は元気そうだから怪我だろうか。

「おはよう、どうしたのかな？」先生は相変わらず優しい声で聞く。

「んー授業タルいからさばりに来た！」

なんだそれ。思わず声が出そうになった。サボりを公言して保健室に来る生徒など本当にいるのか。その男子生徒の声は先生のものとは違ってキンキンと頭に響いた。最悪だ。再来した頭痛に頭を押さえる。さらに悪いことに、その生徒はどうやらサボって寝に来たわけではなく、サボるにあたっての話し相手が欲しかったらしい。先生にむかって数Bの古屋の話し方が独特だの親が勉強しろとうるさいのと無駄に大きな声で話しかけている。

「岡田君、体調不良で寝ている子がいるからもう少し静かにね？」先生が困った風にたしなめてから少しましになったが、ずっとこのキンキン

した声を聞かなくてはならなかった望は一時間一睡もできなかった。

結局、あまり体調は回復できなかった。先生にお礼を言ってふらつきながら教室に戻る。ドアを開けると一瞬、教室が静まりかえる。無数の視線が一気に刺さる。それは一瞬で、またすぐにそれぞれの雑談が再開され、何事もなかったかのように教室はざわめきを取り戻す。雑談をしながら、何事もないようにこちらを窺っている。

教室は水族館の水槽に似ている、と思う。大きな群れを成す魚、たった一匹で泳ぐ魚、そして、上手く泳げない魚。小さい魚は大きな魚に食われないように必死になりを潜めていなければならない。

いつだったか小学校の遠足で行った水族館を思い出す。最初に行ったブース。真ん中にあつたイワシの水槽で群れに追いつけない一匹がいた。生まれつきなのか、右のひれが小さく、上手く泳げないようだった。ぐんぐん泳ぐ大量の群れに圧倒されて小さな一匹には誰も気が付かない。望は何かモヤモヤとしたものが胸に広がるのを感じた、自分に似ている気がした。そのモヤモヤは楽しみにしていたイルカショーを見ても消えてはくれずに帰りのバスまでずっと続いた。

あのイワシはまだあの水槽にいるのだろうか。席に着きながら考える。ずっと群れに追いつけずにそれでも置いて行かれないように必死で泳いでいるのだろうか。水槽の中だからはぐれることなんてないのに。いや、はぐれられないからかもしれない。

ひそひそと話す声が耳を伝う。望はそれが自分に向けられたものだと知っている。知っていて、気づかないふりをする。気づかないふりをして黒板を睨む。侮蔑と好奇が混じったような視線が背中に刺さっている。水の中は、上手く息ができない。

視線は望が教室にいる間中ずっと刺さり続ける。

その日暮林先生は出張らしく不在で、保健室は開いていなかった。朝から体調が悪く、二時間目に立ち寄って知った。あれからというものが保健室で寝ていると岡田がサボりに来てあのキンキンする声を響かせていくことが度々あり、その度に保健室での安眠を奪われていた望はますます睡眠不足だった。岡田め……！喋ったこともない岡田を恨めしく思う。そのまま四時間目まで何とか耐えたが、昼休みに早退することにした。熱が出ているのだろうか体の節々が痛く頭がガンガンする。

「山内さん帰るの？」

リュックに教科書を詰めていると横から声がかかった。クラスでも目立つ女の子二人組だ。

「また、体調悪いんだね」

貼り付けた心配の裏に見え隠れする嘲笑。頭が痛い、ガンガンする。

「大丈夫？早く帰った方がいいよ」

「ありがとう」とだけ答えて足早に教室を出た。上手く笑えていただろうか。

廊下に出ると熱が上がっている気がした。そのままふらふらとした足取りで歩く。

「……っ、すみません」

と、誰かにぶつかつた。蚊の鳴くような声に思わず振り返る。ここ数日でよく聞きなれた声だ。ぶつかつた生徒は着崩さずきつちりと着た制服に男にしては長めの黒髪で、猫背で俯きながら廊下の隅を歩いている。……まさか。本当に？

逡巡していると前から歩いてきた男子の集団がその黒髪の生徒に話しかけた。

「あ！岡田ちゃんどういところ！わるいんだけどさあ、今日のそうじ代わってくんね？」

「え……」

「な？いいだろ？」

「……で、でも昨日も僕が……」

「いいじゃん、俺たち忙しいわけ。友達だろ？」

さらに背中を丸めてぼそぼそと答える生徒をその男子達はニヤニヤとして囲みだす。

ああ。君も、泳げない人だったのか。

そういえばいつもベッドのカーテン越しに声を聞くだけで顔を見たことはなかったなと思う。想像していたイメージとの違いに驚いたが同時に納得もしていた。先生はサボりに来る岡田を一度も注意したり追い返したりしなかった。きつと分かっていたのだろう。

チャラチャラとまぶしい男子グループに対して、岡田は消えなかった蛍光灯みたいだった。相変わらず下を向きながらどうやら了承したらしい岡田の背中は今にも消えてしまいうるうるに見えた。

その翌日の体調は最悪だった。昨晩はモヤモヤとして一睡もできず、昨日の熱も引いていないみたいだった。一時間目は数学だったので何とか出たが、板書をとるので精いっぱいだった。今日は数学以外に苦手教科はないので早退してもいいかもしれない。

「山内さん今日も帰るの？大変だね」

保健室に行こうと立ち上がると昨日の二人組にまた声をかけられた。

「ううん。保健室」

息が詰まってかすれた声が出る。『心配な顔』を作って尋ねる二人をすり抜けながら、今日は何としてでも終礼まで耐えようと決意した。

「ベッドを貸してください」保健室に入るころにはふらふらで先生に早退をすすめられたが、出たい授業があるからと断った。

「せんせーおはよー」

ベッドに横になると、今日も岡田が来た。今日も科学の安田の授業は眠くなるだの最近妹に彼氏ができたのと懲りずに話している。

相変わらずキンキンした声だが前ほど不快ではなかった。昨日くらい小さな声を出してくれたら、頭に響かないのに。そう思ってから少し虚しくなった。

泳げないことを必死で隠さなければならぬ岡田。

かわいそうな岡田。

硬いベッドにゴワゴワしたシート、消毒液のにおい、時々、先生が何やら作業する音。それから、岡田の声と先生の相槌。

その日望は久しぶりに保健室でぐっすりと眠りについた。あの、イワシの夢を見た。

## 佳作

# ナナコ

熊本県立御船高等学校 一年

白石 明代

都立泊自然動物公園には、十数種の小型の種を中心とした動物たちと都心からはアマゾンの奥地へ迷い込んだような感覚さえ覚えるような豊かな緑草木が静かに暮らしている。大都會の中心という立地ながら喧騒から切り取られたこの場所は平日は散歩を日課にする老人や週末になれば家族連れの姿も見え、穏やかな時間が流れていた。園の門を抜け少し歩いたところにこの園で最大の動物であるアフリカゾウの飼育舎がぼつり、ひっそりとおかれていた。

ここにいるのも随分と長いものになってきました。わたしはここへ訪れる人々や園のみなさんから「ナナコ」とよばれるのんびりしあわせな日々を過ごしています。とくにお世話になっているのがわたしを担当してくださっている飼育員の二人で、一日に百キロのたべものを平らげるわたしの世話によく働いてくれています。その二人の年の若いほうである早田有太くんは昨年わたしの担当として配置された新人飼育員で、ほんの少しばかりどこか抜けているから、わたしと同じ年でありまたわたしがこの園へきてからというものの三十年来面倒を見続けてきたベテラン飼育員である田島平造からときに大目玉を食うこともあるようです。田島さんは前述した通りわたしが五歳でこの園へと連れてこられた当時の新人飼育員で、当時は彼もまた同じように先輩からよく叱られていたもので

す。そんな二人や、わたしの飼育舎の前で足を止める人々の中には、わたしにいろいろな話を聞かせてくれる方がいる。あいにくお返事はできないけれども、この大きな耳でしっかりと聞いています。

朝になり、田島さんが「ただいま」と言って飼育舎へ食事を持ってきてくれた。食事を終えて外へ出ると朝の散歩のみなさん方と、今日もまた、あの子が来てくれる。今日は大学の授業で自分の研究を発表する予定で、今から緊張しているのだと教えてくれました。彼女は週に三、四日、決まって朝のこの時間になるとやって来て、決まって二十分ほどわたしへこんな風に日常の中の出来事を話してくれるのです。彼女がはじめてここを訪れたのは三年前の夏でした。その時からずっと通い続けてきているのです。彼女はなぜこの場所へと来てくれるのか、わたしは知っていないのですが、彼女がここで聞かせてくれる話が大好きでした。

本宮琴加は泊自然動物公園の近くにキャンパスを置く大学の三年生になる。「超一流」「名門」というなによりもこの就活戦争時代もど吹く風のネームバリューに惹かれ、どうしても、と強い憧れに支えられ入学したこの大学でそれなりに、というかなかなり楽しく忙しく、充実した生活を送っている。中学時代、交通事故により両親をいっぺんに亡くしたときにはこれから先の人生なかなかハードモードだと悲観しかけたが、今になればあのとき諦めることをしなかったわたしを抱きしめてあげたいと思う。それはそうと、現在のわたしの話なのだが、いよいよをもつて就活が解禁されたことにより忙しさは前にも増していくことになる。もともとは少しの時間でもじっとしていられない、いたくない、というような属性の人間なので忙しいこと自体は苦にならないのだが、ナナコに会いに行く時間、回数が少なくなってしまうことは、琴加にとって割と憂鬱な案件であった。

今日もあの子が会いに来てくれました。なんだかちよっぴり浮かない表情をしている気がして、だからいつもより彼女の近くまで行って話を

聞きました。

「だから、わたし頑張ってくるからね。」

就職活動で忙しくなるから、きっとここへ来る頻度は減るけれどまた訪れたときには話を聞いてね、最後に口角をクツと上げて笑顔を見せてくれた彼女は小走りぎみで去ってゆきました。その後は宣言通りそれまでは一週のうち三、四日訪れていたところを週末に一、二日といった具合にはなりましたが、彼女の話を楽しみにしていたし、会いに来てくれることが本当に嬉しかったのです。

その宣告を受けた時、何故だかほっと安心感さえおぼえるほどに心は落ち着いていた。

いつも通り、ナナコにエサを用意している時だった。どうしても立つていられなくなったオレはマズい、と感じたままにその場にうずくまったらま動けなくなった。タイミングというものがよかつたのか、はたまた最悪だったのか、早田により発見されたオレはそのまま救急車で病院送りとなりそこで、ステージ4、末期の大腸ガンであるということ、そして、

「次の正月、いえ、冬を迎えるのは厳しいかと…」

つまり、オレの「余命」はせいぜいあと「半年」といったところらしい。余命宣告なんて、うけるつもりはこれっぽっちもなかつたんだなあ。ピンピンコロリで、そちらへ何う予定だったんだけどなあ。ナナコの飼育舎の錆び付いた檻を眺めながら声にせず呟いた言葉は誰に届くこともなく宙を彷徨っているように思えた。

怖かった。神様が分量を間違えて鈍臭さモリモリに仕上がっているはずのこの僕が、はじめて「嫌な予感」というものを理解した、気が、した。あの日飼育舎でうずくまっていた田島さんを発見した時、感じてしまった。田島さんが飼育舎へ帰ってきた日、どうしても聞きたそうにしている僕の様子を察したのか、答えは田島さん自ら語られた。

「末期のガンで、余命半年？」

驚き、とか悲しみ、とかそういうのではなくてそれを超越した何かがあった僕はただオウムのように田島さんの言葉を繰り返すことで目の前に突如として突き出された現実、いや、ある程度自分の中で覚悟していたはずだった現実を反芻してなんとか飲み込むことに努めた。

夏になると、わたしを取り巻く環境が大きく変わりました。まず、田島さんがこの飼育舎へ帰ってきていません。もう一か月は顔を見ていません。なぜなのか、今はどこでなにをしているか、そして次はいつ会えるかな、といろいろありますがわたしに知る術はありません。そのかわり、と言うのもなんですが、早田くんが以前の田島さんのように一人でわたしの面倒をみてくれるのです。暑い暑い真夏の昼、田島さんもしてくれたようにホースで冷たい水を浴びさせてくれるのです。

その年の十二月の始めに、田島さんは亡くなった。最後までナナコと、僕のことを心配しながらいつもみたいに笑っていた。

冬になると飼育舎に田島さんの写真が置かれました。いつもの様に笑っている田島さんはニョキッと写真立てから現れそうで、想像すると笑えます。もう、かなりの間会っていないけれど、元気にしていますか？ たまには、会いに来てくれるのも良いのに、と思ってしまう。

あれからどれだけ時間が経ったのでしょうか。結局、まだ一度も会いに来てくれませんね。わたしも早田くんも、当たり前ですが年を重ね、早田くんなんて田島さんの年齢にも近づいて…そうですね、わたしの中にいる田島さんはあの時のままでいるのです。

いつもより、よく眠った気がしながら目を覚ましたそこは、美しい場所、そこには最後に会ったあの時のまま、いえ、すこしばかり痩せたようにも見える笑顔を見つけました。

「オマエもばあちゃんになったんだなあ。」

## 入 選

「今日僕は傘を忘れたことになっている。」

東京・朋優学院高等学校 二年 村田 菜月

「モルモット」

福岡県立明善高等学校 二年 原田 真緒

「マカロン・トイレットペーパーのロマンス」

千葉・麗澤高等学校 一年 高橋 芽意

「彼岸花の追憶」

富山県立富山高等学校 三年 松原 芽衣

「願いの石」

長崎・聖和女子学院高等学校 三年 岩木ひより

「STAGE」

宮城・常盤木学園高等学校 三年 渡邊 奈緒

「緑色の日記」

岡山・津山工業高等専門学校 二年 坪井 元春

「三分間」

東京・クラーク記念国際高等学校 東京キャンパス 二年 梶 智暁

「ストライキ」

東京・海城高等学校 二年 児浦 利幸

「カッター」

青森県立弘前高等学校 二年 草刈 邑依

## 短篇小説の部選評

作家

井上 孝雄

今年は昨年より一〇〇編多い約六〇〇を越える作品が集まったとのこと、その中の三十一編を審査員三人で審査した。

どの作品も力作揃いで、とても面白く楽しませてもらった。いつもながら思うのだが、応募者の若い感性は素晴らしくそのパワーに圧倒されている。それぞれの作品には日常に感じたことを様々な形の言葉で紡いでいく、そんな等身大の高校生たちの日々の姿を見ることが出来た。また、今年の特徴として「死」をモチーフにした作品が多かったという感想が審査員の中で交わされた。「青春」という言葉を持ち出すのが妥当かどうかかわからないが、人生の中で「生」真つ最中、精神的な時期である高校生がその対極の「死」について触れた作品が多かったのも「生」と「死」は対極でありながら裏表のように近いものであるのだと改めて考えたりもした。

最優秀作は『ハンバーク爆弾』とした。祖父の死を消化しようとする女子高生の小説で、人間は心の奥に様々なものをかかえて成長するのだと気づかせてくれる小説でもあった。きっかけは祖父の死に関連して起こる従兄への嫉妬、祖父の言葉を巡ったもの。人間は他者との間

や様々な事象の中でわき起こる押さえきれない感情を自分の心のサイズにあわせてため込むものだと思う。しかし、ため込むことの難しいもの、消化しきれないものはやがてオリのように心に沈殿され、いつしか堰を切ったように溢れ出すのではないか。それをこの作品は「ハンバーク爆弾」と表現し描いている。誰の心の中にもあるものかもしれない。作品として良くまとまっておりますはしっかりと終えられている。さわやかな印象を残す良い小説として最優秀にはふさわしいと審査員で一致した。

以下、二作が優秀賞作品。

『青を焚く』、大切な人の死や、新たな道へ進む：人生を何度かリセットする時が人にはあると思う。その際の儀式として焚き火をするという小説でありその過程を描いた作品である。まだ寒い3月の早朝主人公と父は様々な思い出を海岸で燃やし続ける。そして炎を眺めながら過去を振り返り一つ一つ自分の心で整理していく：前述の「ハンバーク爆弾」とは違う形の心の消化を思わされた。その過程、登場人物の一つ一つの行為にとっても引き込まれた。焚き火の炎の描写が巧みに心情表現と重なり、絵画的な雰囲気を感じていく。小説としてレベルの高さを感じた。

もう一つは『春の七草』。「せりなずな」という名前の女の子と文芸部の部長である男子高校生が登場人物。この小説はとも軽快で弾むように、読みながら思わず吹き出しそうになった。会話文が多いことが欠点にならず逆に生き生き

とさせキャラクターを魅力的にさせていた。歳時記を巧みに取り込んでおり、最後はちよっぴり希望も描かれているまとまった小説であった。

以上選評であるが最後に、審査の途中「この小説文体がいいね」ということが何度か語られた。様々なアイデアを考え、キャラ設定、プロットなども考えて創作されていることと思うが、文体なども意識するとより一層よいものになるのではないかと考える。

それでは来年も高校生の若い力に出会うことを楽しみとしたい。

### ●井上孝雄(いのうえ たかお)

昭和三十八年東京生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了。公立高校国語科教員。筑摩書房地域教科書編集委員。文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課委員。所属団体、國學院大學国語教育研究会、日本国語教育学会、日本文学協会国語教育部会。最近執筆の論文、「村上春樹『レキシントンの幽霊』論 ―作品の魅力と学習材としての魅力―」（二〇一五年）。「三つの小さな物語 ―学習材としての川上弘美『水かまきり』論―」（二〇一六年）。「主権者教育についての一考察 ―村上春樹『青が消える』(Losing Blue)を教室で読む―」（二〇一七年）。